

8.電気、ガス、水道が目の前から消えたとして・・・・・

2011 東日本大震災の時は、午後の発生でしたので、瞬時に困ったということを感じませんでした。やがて夕方～夜になってくると、何をするにも身の回りのことができないことを痛感しました。まさに消えて初めて、光熱のありがたさというか暮らしの根本であることを知るものでした。都市部に限りませんが、いまは自家とか自己とかでは光熱源は得られず、システムに何かがあれば地域全体が一斉に支障をこうむるということになります。つまり、普段の生活では中央集中型ライフラインに頼っているの、個人ではどうすることもできないシステムに組み入れられているという感じです。万が一の時には、手動とか自家用とかのシステムに変換できる分散型があれば、災害時には重宝しますので残しておきたいものです。これには、プロパンガスとか巨大バッテリー、井戸、まきストーヴといったものも考えられますが、同時に社会資本として小規模型で供給可能な整備ができないのかです。また、東日本大震災の時のことですが、わが家では石油ポリタンクがいくつかありましたので、これを活用することで大変に役立ちました。その時には耐震仕様の家庭用タンクが普及して活用されていたらと思ってしまいました。そのためには、タンク内の量を測定できるセンサーネットワークを配置して、常に充足できるようにしておくことで管理をする。これによって、高齢者などでは手間がいらずに済むのではないのでしょうか。と同時に、電気不要のファンヒーターではない電気ストーヴも供与しておきたいものです。加えれば、一家に一台でなくても、キャンプ用の発電機（定期点検、起動試験が必要）など自治会単位で数台設置しておくと思ふかると思ふいます。いずれにして、灯油タンクにしても車のガソリンにしても、半分になったら満タンにするということにしておくと思ふいいました。この辺をうまく運営していくと、1週間程度は自力で過ごせる可能性があると思ふいます。それにしても、頼りのガソリンスタンドが地域から消えていつているのも気になります。災害へのそなえには、家庭でできるものもあるし、心がけておくこともありますが、大事なことは地域で、住民主体で災害発生時の光熱対策も検討しておきたいと思ふいます。確かに、何かあれば行政支援を期待することはできますが、それまでには時間がかかりますし、地域の環境によってはスムーズな物流が保証されていません。出来るだけ自助の範囲を拡大して、日ごろからの課題を洗い出して行政支援で整備しておくことが必要だと思ふいます。この防災は、行政だけでは前に進めないもので、地域をよく知っている住民の方々が知恵を出し、工夫して提案するということをしていかないとはいけません。防災対策は、適切な事前の投資が復旧や復興のコスト縮減になるし、何と言っても発生した時の不安や心配を和らげることが前に進む元氣力にもなるということのをあの東日本大震災の経験で強く感じたのを今でも覚えています。

話が戻るようですが、中央集中型ライフラインの機能保全、管理、整備は電力会社、ガス会社や行政の役割ですが、これだけに頼っているのは災害時には不安です。地域住民が主体となる分散型のライフラインの構築は、地域での検討されるものの一つではないでしょうか。